三瓶火山の約２万年前の大噴火を調べる
ー軽石・火山灰の噴出は何度繰り返したか？ー

自然・環境評価研究部　地球科学研究グループ　　加藤　茂弘

島根県の三瓶火山は約３千年前まで噴火を繰り返してきた、近畿・中国・四国地方で唯一の「活火山」です。

三瓶火山で最大の噴火の一つは約２万年前に起きています。この大噴火では、大規模な小田火砕流の噴出に引き続くプリニー式の大噴火により、近畿地方南部や東海地方西部、さらにその沖合の遠州灘にまで軽石や火山灰（三瓶浮布テフラ）が降り積もりました。その直後に再び大規模な緑ヶ丘火砕流や浮布降下火山灰が噴出し、その一部が近畿地方の中・北部に軽石や火山灰として降り積もりました。

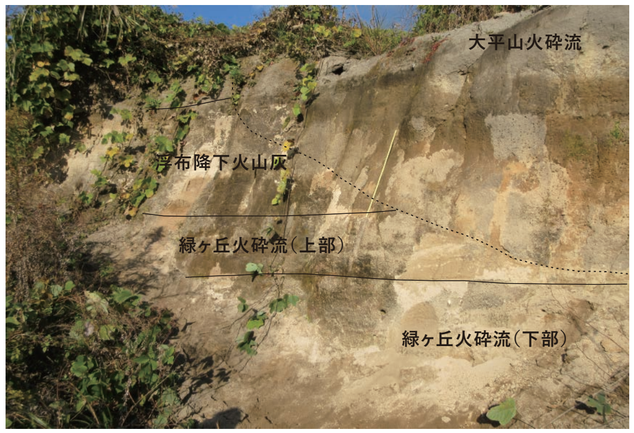
1996年に小田火砕流の一部が神戸市周辺に降り積もった可能性を、2007年には近畿地方中・北部に分布する約２万年前の阪手火山灰が三瓶浮布テフラに対比でき、少なくとも２回の大噴火により軽石や火山灰が広域に降り積もった可能性を、それぞれ報告しました。約２万年前に起きた複数回の巨大噴火は2019年に検証されましたが、噴火の総回数は明らかになっていません。

そのため今は、小田火砕流の広域分布とともに、噴火の回数や噴出物の降下範囲に興味を持って調べています。

浮布池から眺めた
三瓶火山の峰々

三瓶火山は男三瓶、女三瓶、子三瓶、孫三瓶の4つの峰からなります。それらの間には、約6千～3千年前の噴火で生じた最新の室ノ内火口があり、一部が火口湖となっています。

浮布池は、柿本人麻呂による万葉集の和歌、「君がため浮沼池の菱摘むと我が染めし袖濡れにけるかも」で謡われた「浮沼池」と考えられています。



緑ヶ丘火砕流の模式地

緑ヶ丘火砕流やそれを覆う浮布降下火山灰の分析用試料を三瓶カルデラ内の模式地で採取します。

三瓶浮布テフラの模式地

年を取ると野外調査がつらくなります。苦虫をつぶしたような顔がそれを物語っています。